

## テクノロジーを活用した 企業就労のさまざまなカタチ

ジャパンコントラクトフード(株)、プロテック(株)、就労移行支援事業所「Do-will」、(株)オリィ研究所

横河電機株式会社 箕輪 優子

●特集●  
就労のさまざまな取組み



### 取材先データ

#### ジャパンコントラクトフード株式会社

〒101-0032 東京都千代田区岩本町 3-4-6 VORT 岩本町 I  
TEL 03-5821-6351 FAX 03-5821-6352

#### プロテック株式会社

〒221-0056 神奈川県横浜市神奈川区金港町 6-3 横浜金港町ビル 7F  
TEL 045-444-3501 FAX 045-444-3503

#### 就労移行支援事業所 Do-will

〒158-0097 東京都世田谷区用賀 3-11-15 C・Iビル 2F  
TEL/FAX 03-6432-7878

#### 株式会社オリィ研究所

〒181-0013 東京都三鷹市下連雀 3-3-50 パークファミリア 501

### 編集委員から

2016(平成28)年1月号「編集委員が行く」で、ICTの活用により仕事や生活の場面においてさまざまな可能性が広がるということをお伝えした。今回は、運動機能に制約のある方が、企業が開発した配膳用電動車いす、パソコン、分身ロボットなどを活用し、自分の得意なことを活かしながらそれぞれ異なる職種で活躍している3人をご紹介します。



(写真) 小山博孝

Keyword : 肢体不自由、障害理解、職務創出、業務体制の工夫・改善、職場環境の整備、キャリアアップ



東京都町田市庁舎1Fにあるカフェ「ダーリントンホール」

## POINT

- ① 本人の能力を引き出し「得意なこと」を育てるための環境
- ② 「どうすればできるか」の視点
- ③ 機器の活用により広がる職域とキャリアアップ

### 東京都町田市庁舎内のカフェ ジャパコントラクトフード(株)

東京都町田市の市庁舎1Fにあるカフェ「ダーリントンホール」で、ホールの仕事をにらっているジャパコントラクトフード(株)の神澤翔さん(20歳)を訪ねた。ご両親が飲食業に就いていたこともあり、神澤さんは子どものころから「将来は飲食業界で働きたい」という明確な夢を持っていたそうだ。神奈川県立の特別支援学校を卒業後、就労移行支援事業所「JUNCTION厚木」の支援を受け、念願の



配膳用車いす「AUTO-ZEN」を使って仕事をする神澤翔さん

飲食業の職務に就いたという。

神澤さんは、入社当初は下膳(さげぜん)を担当していたが、注文を受ける際に使用する社内用語を自主的に覚えるなどの努力が認められ、現在はオーダーや配膳へと職務の幅が広がっている。オーダーの仕事は、「お客様がどのメニューを選ぶのか楽しみ」とのこと。おすすめを聞かれることもあるので、お客様のお好みに応じておすすめできるよう、毎日メニューをしっかりとチェックしているという。「おすすめしたメニューを召し上がったお客様から『美味しかった』と喜んでいただけることが嬉しい」と話してくれた。

神澤さんが仕事をするうえで、第一に大切だと思うものは「体力」だという。飼っている犬の散歩をしながら毎日歩くこ

※1：配膳用電動車いす「AUTO-ZEN」について、開発にたずさわったプロテック(株)代表取締役の徳丸剛さんにもお話をうかがった。

「人材確保に苦戦する飲食業で、独歩が難しい障害者や高齢者がホールスタッフとして活躍していただくことを目的に開発しました。手元のレバーで操作できる電動車いすをベースにしたことで衛生面はもちろんのこと、車いすの自操が難しい上肢の力が弱い方にも使いやすい機器としました。

『AUTO-ZEN』は、物を運ぶ仕事でご活用いただけるツールの1つ。この機能は、工夫次第で工場での部品供給や、郵便物の集配などにも活用できます。『AUTO-ZEN』などの機器を活用することで、下肢に障害のある方の雇用促進、職域拡大につながることを願っています」



プロテック(株)代表取締役の徳丸剛さん

とで体力をつけ、仕事中は配膳用電動車いす「AUTO-ZEN※1」を使用して体力を維持できるように調整しているという。『AUTO-ZEN』を使う際には安全運転が大切なので、操作の練習を積み重ねました」と語るだけあり、お客様が着席して狭くなったホール内の移動や、『AUTO-ZEN』を定位置に戻す際の縦列駐車は実にスムーズである。

もうひとつは、オーダーの際にミスをしないこと。お客様にお渡しする伝票に





神澤さんの上司、ジャパンコントラクトフード（株）取締役の方山典優さん

は金額も記入するので、間違いのないように特に気をつけている。

オーダーを取ることで、例えば「金曜日  
はカレーのご注文が多い」、「気温が低いと  
ドリアのご注文が多い」、「メインに添えて  
ある野菜を残す方が多い」など、そのとき  
どきの傾向に気づくことがある。よりよい  
サービスを提供するために、今後は気づい  
たことを店長に報告していきたいという。

### 次の目標は？

神澤 お客様と接することが好きなので、  
レジの仕事もやってみたいと思います。暗  
算が苦手なので、電卓を使うなどの工夫を  
しながら、レジの仕事にもチャレンジして  
いきたい。

### これから就職を目指す方々へ

神澤 企業での実習でいろいろな仕事を  
試したうえで、自分にあつた仕事を探し  
てほしい。自分がやりたいと思った仕事を  
見つけたら、ぜひその意志を貫き通してほ  
しいと思います。

神澤さんの上司である方山典優さんに、  
神澤さんの仕事ぶりについてうかがった。

「採用時には、まず接客に適性があるか  
を見極めますが、神澤さんは挨拶はもちろ  
んのこと、笑顔が素晴らしい。接客態度に  
ついてはお客様からお褒めの言葉をいただ  
くこともあります。オーダー時の伝票の書  
き方など、社内独自のルールを自主的に覚  
えるなど意欲的でもあります」と、とても

高い評価をしている。

職場では、本人の希望により平日に4日  
間、1日4時間（10時～14時）の勤務で、  
疲れやストレスを軽減するために、1時間  
に1回10分間の休憩時間を設けるように  
配慮しているという。

### 障害のある人の雇用促進のために必要な環境や条件は？

方山 当社のように、自治体や企業等の  
委託を受けてお客様の事業所内で営業す  
る場合は、委託主の理解が得られるか否  
かが重要です。町田市は障害のある方の  
雇用促進の取組みに積極的だったため、当  
社での雇用が実現しました。また、障害の  
ある社員の育成には、一緒に働く社員の理  
解を得ることも必要不可欠です。当初、障  
害のある方がフロントヤードで働くことに  
漠然とした不安を抱いたり、「忙しいなか  
で新人を育てる余裕があるかわからない」  
という意見も出しましたが、神澤さんの笑  
顔と働きぶりが社員の不安を払拭してい  
きました。

## 就労移行支援事業所 「Do-will」

6月から介護ビジネスの企業で働くこと  
になっている※和田旺さん（24歳）を訪ねた。  
和田さんは特別支援学校高等部を卒業  
後、大学に進学した。大学卒業後は企業  
に就職することを目指していたが、体力  
面で不安を抱き、就労移行支援事業所を

利用することにした。独学で習得したパ  
ソコン操作のスキルをさらに向上させたか  
つたので、インターネットで調べ就労移行  
支援事業所「Do-will」を選んだ。その結  
果、MOS (Microsoft Office Specialist) の  
「Word」や「PowerPoint」は1000点満  
点で合格し、「Excel」についても975  
点と高得点で合格した。正確性を求めら  
れる仕事が得意だと思っていたが、MOS  
の試験結果を根拠に自信をもつことがで  
きたという。

「人と接する機会の多い福祉業界で、人  
の役に立ち、自分の得意なことが活かせる  
『パソコンでデータをつくる仕事』に就  
きたいと思っていました。週5日間、電動  
車いすでラッシュアワーの電車に乗り、フ  
ルタイム勤務をするという状況には体力的  
に不安があるものの、100%在宅の仕事  
では人との接点が少なくなってしまうま  
す。そこで、勤務時間11時～17時、体調  
に応じて在宅勤務も可能、月に1回の通  
院も了承というフレキシブルな働き方がで  
き、自宅から電車で2駅、オフィスがビル  
の1Fにある介護ビジネス企業に入社す  
ることを決めました」

和田さんが6月から勤務する企業では、  
「介護保険の請求」、「社員の給与」、「顧客  
情報管理」などを担当する予定だ。例えば、  
台帳（紙ベース）で管理しているお客様情  
報を、データベース化し業務効率をアップ  
する仕事を担うなど、さまざまなアプリケ

※取材日：5月24日（火）



和田さんの「魔法の棒」



就労移行支援事業所「Do-will」で訓練に励む和田旺さん



1 ションソフトのスキルを習得している和田さんへの期待は大きいようだ。

### 障害のある人の雇 用を検討中の方々へ

和田 就業時間や場所だけでなく、職場までの道中をどうするか、生活とどう両立するかも大きな悩みとなります。意外と小さなことでも、自身では働くうえで大きな障害と思い込んでしまっています。障害者としてではなく、人と人としての対話をお願いできたらと思います。

### これから進学や就職を目指す方々へ

和田 進路先や就職先がなかなか決まらなと不安になることもあります。頑張ってほしいです。働くことに関しては「これならできる」ということを常日頃から考えることが大切だと思います。責任を持つてしっかりと自分で考えること、だれかを頼るのではなく、自分でできることを増やした

り、できることを維持したりすることも重要です。社会人としてやるべきことは、障害のある人もない人も同じだと思う。どのような些細なことでもよいので、ぜひ頑張っしてほしいと思います。

明るく積極的な印象の和田さんも、中学生まではマイナス思考だったという。食事やトイレは家族の介助が必要であり、1人で外出をしたこともなかった。学校の体育の授業は見学や得点係など、同級生の輪の中に入って一緒にスポーツを楽しむチャンスはなかった。

東京都立光明特別支援学校高等部に進学し、最初は馴染めるか不安だったが、使いやすいよう自由自在に曲げることができるようになった。教師と一緒に工夫を凝らして作成した和田さん専用の「魔法の棒」などを活用することで、食事やトイレも一人でできるようになった。用途に応じてさまざまな道具を活用することで「自分でできる」という体験を積み重ねていくなか、「できない」と諦めるのではなく、「だれかの手を借りなくてもこうしたらできる」というプラス思考に変化していったという。

「まさかできるとは思っていなかった。陸上、球技、ハンドサッカーなどのスポーツにプレイヤーとして参加するようになって、他校の選手と交流をするなかでライバルもできました。スポーツを通じて出会った人とのつながりは10年近く続いていま

す。高等部3年では1人での外出もできるようになり、光明特別支援学校を選んでよかったです」と、数々の成功体験を嬉しそうに話す笑顔がとても印象的だった。

和田さんが通う「Do-will」施設長の鈴木千恵子さんにも、お話をうかがった。

鈴木さんは、「大学に通っている頃は体調を崩すことが多かった和田さんが、『Do-will』に通うようになって自分の生活リズムをつかみ、体力に応じて自分から休憩を求めるなど、体調管理やペース配分もできるようになった」と話す。

社会性を伸ばすプログラムでは、人の関わり方、自己決定力、ビジネス文書やレスポンスのタイピングなどを含む意思伝達力を習得していったそうだ。和田さんの場合、単純作業の仕事は体力的に「難しいので、Excel VBAやJw-cadなど、裁量でできる職種に就くためのアプリケーションソフトのスキルアップも図っていた。『Do-will』では、和田さんをモデルに後輩が続いている。

### 障害のある人の雇用を検討中の方々へ

鈴木 重度の身体障害により物理的なハンディがある方の場合にも、専門性の高いITスキル、職務遂行において必要な判断力、自己決定力などに長けている方がいます。障害が重いと、環境整備も大掛かりになると思われるかもしれませんが、小さな工夫があれば、持っている能力を最大限に





岩手県盛岡市にある番田雄太さんのご実家を訪れて取材する箕輪優子編集委員



ベッドで仕事を進める番田さん

發揮できる方も多いのです。障害により  
発話や書字がスムーズにできない方でも、  
IT機器を活用することでコミュニケーションシ  
ョンが問題なくできる方も大勢います。  
「社会参加」にはさまざまなカタチがあ  
りますが、そのなかでも「働くこと」は障  
害のある方だけでなく、家族にとっても  
重要な意味があると思います。雇用を検  
討するにあたって、まずは、障害のある方  
一人ひとりに直接会っていただきたい。

## （株）オリイ研究所の 分身ロボット「OriHime」

東京都三鷹市の（株）オリイ研究所の  
社長秘書を務める番田雄太さん（27歳）

の職場（岩手県盛岡市のご自宅）を訪ねた。  
番田さんは、4歳のときに交通事故に  
遭い、頸椎損傷のため首から下を動かす  
ことができず20年間長期入院をしていた。  
そのため学校には通えなかったが小学1  
年生からパソコンを使うチャンスがあっ  
た。10歳のときから顎を使ってパソコンを  
操作するようになり、自らWEBにアク  
セスして情報を得ながら、生きるうえで  
必要なコミュニケーション手段も習得して  
いったという。

2013年に、番田さんが（株）オリイ  
研究所の社長のフェイスブックにアクセス  
したことが、2人の出会いのきっかけであ  
る。インターンとして社長の講演会に同行  
し、分身ロボット「OriHime」の操作をす  
るなどの経験を経て2年前にオリイ研究所  
に入社した。

番田さんは、社長とともにさまざまな会  
議や講演会に「OriHime」で参加、自宅の  
パソコンから遠隔操作しデモンストレーシ  
ョンなどの広報活動を行うかたわら、多忙  
な社長の秘書として、スケジュール調整な  
どの職務もこなす。自らも「OriHime」の  
ユーザーである番田さんが実感しているの  
は「テレビ電話システム」では感じられな  
い「分身ロボット」の存在感だという。自  
社製品である「OriHime」の存在感やリア  
ル感など、その魅力や機能などを伝えるこ  
とも番田さんの重要な役割の1つだ。

番田さんが仕事をすすめるうえで大切だと

思うことは、「コミュニケーション力」だ  
という。

「常に社会とのつながりを持ち、社会  
の「価値」になることが仕事だと思っ  
て、日頃から社会の方々と言葉を交わすこ  
とを大切にしています。秘書としては、社  
長との会話も重要で、直接意見交換をす  
ることで方向性を決めていくようにしてい  
ます。遠隔地にいても、同僚と一緒に働い  
ていることを意識するため、1日1回は  
「OriHime」を通じて会話をするようにし  
ています」

### これから就職を目指す方々へ

番田 自分が持った夢はひたすら追いかけて、やりたいことは絶対にやり遂げた方がいい。他者から何をいわれても諦めずに貫き通す強い意志を持っていただきたい。

### 障害のある人の雇用を検討中の方々へ

番田 障害があるというだけで「仕事ができない」という固定概念はなくしてほしい。教えてくだされば、いろいろな仕事ができるので、ぜひ期待をしていただきたい。重度の障害があると、在宅勤務がベストだと思われる方も多いかもしれないが、出勤や出張など外に出るチャンスもあつた方がよいと考える人もいる。働き方を含めて、社会参加の選択肢を広げていただきたい。

### 障害児教育に携わっている教員の方々へ

番田 入院生活では我慢することが多く、外出できないことも苦痛でした。身体に重



「OriHime」の開発者、(株)オリィ研究所代表取締役の吉藤健太郎さん



手を振る「OriHime」。番田さんが盛岡の自宅から操作している

【OriHime】カメラ・マイク・スピーカーを搭載し、インターネットを通じて、遠くから操作することができるコミュニケーションロボット。自由に動かせる腕と、たくさんのモーション（動作）を使い、操作する側が自分の感情を豊かに表現できるのが特徴。遠くにいる人が、まるでその場にいるかのように周りを見回し、「OriHime」の近くに居る人と会話ができる。

度の障害があると、関わる大人たちが消極的になることもあります。他者の支援がなければ活動することが難しい状況の子どもたちの体験のチャンスは、教員の積極性や発想の柔軟さに左右されます。特に、特別支援学校では「生きていくうえで必要なこと」を習得できる多くのチャンスをつくっていただきたい。障害があるからこそできることも増やしていただきたい。障害のある子どもたちが夢を持つためには、代弁や代筆をしてもらうよりも、パソコン、タブレット端末、分身ロボット「OriHime」など、障害のある子どもたちが他者と直接コミュニケーションがとれるツールを活用できるように支援していただきたい。

### 今後の目標は？

番田 人が成長をしていくためには「経験」することが大切。見たり、聞いたりにすることに加えて、実際に体験できる機会があると選択肢が広がります。「OriHime」を通じて人とかわることで、自分の存在意義を実感することができ、生きる価値も生まれ、人生が変わっていく。今後は「だれもが社会とつながり、人と関わり、想いを実現できる」ための活動をしていきたい。

番田さんの上司であり、(株)オリィ研究所の代表取締役社長・吉藤健太郎さん

にもお話をうかがった。

(株)オリィ研究所は「身体的問題や距離をコミュニケーションテクノロジーの研究開発により克服し、会いたい人に会えて、社会に参加できる未来」を実現するため、2012年9月に設立された。

「私は3年半、人と接することが怖く、無気力になり、生きていくのが辛かった経験をしています。私とは状況は異なりますが、長い間学校に通うこともできず、楽しみもなく、友達もない環境におかれていたにも関わらず、心が折れずに『少しでも前に進もう』『もう1回トライしよう』という諦めない気持ちを持ち続けていた番田さんを尊敬しています。やりたいことがあると、自分から『一緒にやりたい』という意思を示し、まずやってみる。やってみて上手いかなければ、方法をかえて実現していく。失敗を恐れず、人にも臆病にならずにメッセージを発信し続けるところは素晴らしい。明るくポジティブで人を惹きつける力がある」と、番田さんを高く評価している。

吉藤さんは番田さんのキャリアアップについて、次のように語った。

「仕事を通じて社会とのかかわりが急増したことで、メールや会話などの社会人としての言葉遣いや表現力が上達し、人との関わり方などのコミュニケーションスキルは高くなってきた。『OriHime』の操作についても表現力が豊かになっている。

2年前と比べて、番田さんをリスペクトしている方が増えていると感じている」

吉藤さんが、番田さんに期待していることを聞いてみた。

「ワクワクすること、他者をドッキリさせた、喜ばせたいなど、自分の原動力が何かを自覚し、これからも、やりたいことや自分でなければできないことを実現していつてほしい。会議や講演会などで他者の話を聞き、いろいろなことをどんどん吸収し、積極的に意見を述べてほしい。オリィ研究所の社員として、さらに『OriHime』の魅力を伝えてほしい。そして、これから社会に出ていく子どもたちのだれもが輝く存在になるように、生き方の参考になるような存在になることを期待しています」と語った。

今回取材させていただいた3人には「人との直接的な関わりを大切にしている」「『自己実現』のための強い意志と行動力がある」という共通点がある。また、民間企業が開発した製品や技術を活用することで「自分1人でできること」が増え、企業の雇用形態が多様になっている現代社会において「得意なことを活かした仕事に就いている」という点も共通している。

障害種に関わらず、企業の技術力を活用することで、職種や働き方の選択肢が広がるということ、より多くの方に知っていただきたい。